様式 C-7-2

自己評価報告書

平成　23　年　　3 月　　28 日現在

機関番号：32686
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2008　～ 2011
課題番号：20520300
研究課題名（和文）　仏 16 世紀文学に見る「パン（肉）とワイン（血）」の系譜学（聖体拝領から人肉食へ）
研究課題名（英文）　Representation of《 the bread (body) and the wine (blood) 》in the 16th century French literature
研究代表者
平野　隆文（HIRANO TAKAFUMI）
立教大学・文学部文学科フランス文学専修・教授
研究者番号：00286220

研究分野：フランスルネサンス文学・思想
科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学（英文学を除く）
キーワード：フランス文学、ルネサンス、宗教戦争、聖体拝領、宗教史

１．研究計画の概要
16 世紀後半(ルネサンス期後期､宗教戦争期)に於ける文学作品に於いて、聖体拝領およびそれに隣接したテーマが、広義の文学作品の内に如何に摂取され利用され表象されているかを、16 世紀前半の文学との比較の上に、ジャンル横断的に分析する。その過程で、暴力描写と聖体拝領への感受性との複雑な関係をも明らかにすることを目的とする。

２．研究の進捗状況
(1) 本研究でコーパスとする作品群は、校訂版の存在する有名作品と、校訂版が一切存在しないパンフレ、檄文、諷刺文、論争書などの 2 種に大別できる。前者は言うまでもなく、後者に関しても 2 度のパリ国立図書館への出張によってほぼ達成している。
(2) プロテスタント側としては、主としてジャン･クレスパンの『殉教録』の分析を通し、いわゆる実体変化説への反論や反発が、多くの殉教者を生んだそのシステマティックな仕組みを明らかにした。また、聖体拝領への非難を巡る言説を支える「信念」と、その「信念」がカトリック側の暴力を誘発する時限装置として機能している点も明らかにできた。
(3) カトリック側の資料は、エルヴェ、ラエモン、セヴェールなど豊富に存在し、それらのマイクロ資料の分析から、彼らが聖体拝領の否定を、真に悪魔的な所作として感知し、絶滅すべき対象として措定したことが明確に示された。また、ヴェルステガンの『残酷劇場』にもメスを入れ、プロテスタントの暴力が、拝領した聖体の「摂取過程」と深くリンクしている様子も明確にできた。
(4) 聖体拝領の把捉の仕方と暴力描写の間を連結する暴力描写をも、相互にクロスさせる形で明らかにできた。その点では、ルネサンス前期の諸作品（特に『エプタメロン』）の分析は有効であった。

３．現在までの達成度
②「おおむね順調に進展している」（理由）
パリ国立博物館（B.N.）などでしか参照できない一次資料を多く入手し、その分析作業を順当に進めている点、また、当初に計画案として提示した、(A) ～ (E) の 5 つの主題に沿った研究行程をほぼ辿りつつあり、また、論文や外国（韓国）での発表などでも、研究成果の一部を公にできたからである。しかし、しかし、パン＝肉体、ワイン＝キリストの血、という等式の成立や、その乖離の可能性を巡る論考、および、ドービニエなど大詩人の作品分析がやや遅れている点、さらに、選書メチエ（講談社）に研究成果として纏めるに値するまでの論考の執筆にまだ時間が必要な点が、現時点での反省点である。

４．今後の研究の推進方策
(1)「横溢の美学」としての聖体拝領（カトリック）か、「不在の詩学」としての聖体拝領か、という観点からロンサールとドービニエを中心に論考を進める必要がある。
(2) レリーやテヴェの旅行記に描かれた「カンニバリスム」と、「聖体拝領」が、文化的な偏差を含みつつも、人類学的に重なって見えることについて、論考を纏めねばならない。
(3) パンとワインの系譜学として、ルネサンス期前半のラブレーから、17 世紀初頭の悲劇的物語群（ド・ロセ）に至る、キリスト教に於ける供犠の問題系を、内戦という暴力の表象と折り重ねつつ論じる必要性を強く感じている。

５．　代表的な研究成果
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）
[雑誌論文]　（計 3 件）

①平野隆文、「フランスルネサンス期の文学に見る王権の表象・『神の王国』『魔の王国』」in『王の表象　文学と歴史・日本と西洋』（渡辺節夫編、共著）山川出版社、pp. 227-259、2008 年、査読無。
②平野隆文「ルネサンス文学に見る暴力の表象 ： 暴力・福音・聖体・カンニバリスム –「暴力の福音化から「福音の暴力化」へ –(1) 『エプタメロン』を中心に　（『立教フランス文学第 39 号』、pp. 39–68. 2010 年、pp.　39–68. 査読有。
③ Takafumi HIRANO, 《 Pourquoi et comment enseigner la littérature renaissante française au Japon ? », in *Etudes de langue et littérature française en Asie du Nord-Est pour le XXIème siècle： Enjeux et perspectives,* Université Korea, Séoul, pp. 29-38, 2010. 査読有。

〔学会発表〕（計 2 件）

① 平野隆文　「『エプタメロン』に見る性・暴力・神学」日本フランス語フランス文学会 2010 年度春期大会（早稲田大学・ラブレー・モンテーニュ・フォーラム 2010 年 5 月 30 日）
②Takafumi HIRANO, 《 Pourquoi et comment enseigner la littérature renaissante française au Japon ? », Colloque International organisé par la Société coréenne de langue et littérature française, à Séoul, le 10 – 11 décembre, 2010.
〔図書〕（計 0 件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕